NY エッセイ 82

中瀬有紀

今を生きる

Audubon Mural Project

ニューヨークは短い夏があっという間に終わり、すっかり秋です。東京ではまだまだ残暑が厳しい8月の後半あたりから、ニューヨークの朝晩は冷え込むようになり、夏はとても元気だったバジルの葉が茶色く枯れて落ちていきました。きっと夏の渡り鳥は南へと旅立ってしまったのでしょう。ふと立ち止まって耳を澄ましたとき、鳥たちの奏でる音が少し前と変わっていることに気がつきました。毎日同じように生きていると勘違いしているのは私だけのようです。私を取り囲む自然、そして自然の一部である私の体は諸行無常で、すべてが変わり続けています。

変化といえば、ニューヨークの照明事情も、作品制作中の演出家と顧客からの要求も、時に秋の空のようです。照明業界で長く仕事する友人はそんな現状を「変化の波に乗ってタップダンスするんだ」と余裕が感じられますが、同じ波でも若手にとっては荒波です。どうやらスマートフォンもストレスの根源になり得るらしく、「仕事のe-mailが怖い」と若手の照明仲間から聞いたときはさすがに心配になりました。e-mailの何が怖いかと訊ねたところ、「スマートフォンには過去と未来が詰まっている、写真は過去、e-mailは未来、しかも未来に起こりうるトラブルを想像させる」と言うのです。今すぐに人と繋がることを目的とした携帯電話が、実際には人間を現在よりも過去と未来に縛り、余計な妄想へと導くとは盲点でした。

目の前の「今ここ」を生きる選択をするために必要なアンテナは、過去の振り返り作業によって磨かれますし、そしてその今の選びが未来を創っていく、とも言えるので、必要なのは「現実を受け入れる力」と「それでどうするか」そして「勇気と行動力」ということになるかと思います。確かに仕事には作戦も勉強もなしに現実を受け入れる臨機応変さが必要な場面もありますが、照明業務はプランもオペレートも先見の明が不可欠で、仕込む前に使用する照明器材が作品にどのような影響を及ぼすかという未来を予想するのも私たちの仕事です。

それにしても、情報過多時代に自分を整えるのは本当に難しいですね。諸行無常の世の中で、唯一変わらないと思われる“情報”に振り回されて、自分が変化し続けていることすら見えなくなってしまいそうです。e-mail、SNSやソーシャルメディアのコンテンツから受ける戸惑いも、発信者と実際に会って話すと簡単に解決することがよくあります。情報から得た不安と距離をとって接することのできない状況のままだと、処理能力にも影響を及ぼし、それが、「仕事のe-mailが怖い」という結果を導くのかもしれません。

流動変化の中で生きる私たちを困惑から救うのは「今を生きる」という意識のみだと、私は日本でテレビ照明に携わっていたときに出会い、現在も大変お世話になっている先輩方から学びました。「永遠の今」を精一杯生きることで過去の後悔も未来の不安もなくなる、という先輩方の考え方は、ニューヨークで耳にすることがありません。諸行無常とは東洋的な考えなのでしょう。神様さえも変わり続けるなんて、一神教の世界では言語道断かもしれません。太陽にもいつか終わりが来ることを心配することに意味がないように、私に課されていることは、とにかく今日を一生懸命生きることのみです。